

イスラエル・ユダヤ・中東がわかる隔月刊雑誌

みるこす

No.182

6

2022

❖ 駐日イスラエル大使インタビュー

戦略的な協力関係に

ギラッド・コーヘン



❖ イスラエル並びにユダヤ人に関するノート

ウクライナ戦争と反ユダヤ主義

佐藤 優



観光客が戻りつつあるエルサレム

主の名によって来る者に祝福あれ。

私たちは主の家からあなたたちを祝福する。(詩編 118 章 26 節)



ミルトスはイスラエルに育つ低木。常緑でその葉は芳香を放ち不死と成功の象徴とされた。(イザヤ 41:19)

■ 中東・イスラエル情報

■イスラエル並びにユダヤ人に関するノート■

ウクライナ戦争と反ユダヤ主義 —— 佐藤 優 5

■駐日イスラエル大使インタビュー■

戦略的な協力関係に —— ギラッド・コーヘン 13

■イスラエル 多角多論■

イスラエルと中国 —— 齋藤真言 20

■日本の非常識からみた中東の非常識■

ウクライナに便乗する論者たち —— 滝川義人 28

■日本・イスラエル コラボレーションの道■

多層の視点から理解するイスラエルと日本との関係 —— 新井 均 32

● 聖書・歴史

●サムエル記講話●

ヨナタンとミカル —— ラビ・ベニー・ラウ 52

●目からウロコの新約聖書●

現代ギリシア語で読む新約聖書(2) —— 藤原豊樹 58

●一つの神と三つの宗教●

「カルケドン決定」の功罪 —— 塩尻和子 62

▲ エッセイ

▲イスラエル御馳走帖▲

バブカ —— 越出水月 38

▲聖書の世界 エッセイ▲

大地のこころ —— 池田 裕 42

▲知っておきたい中東・イスラム▲

エジプトのパン事情 —— 光永光翼 72

表紙の絵:「イサクはその土地で種を蒔き、百倍の収穫を得た」(ゲラル、創 26:12)【画・藤井克之】

ユダヤのユーモア 4 ブックレビュー 76 シネマレビュー 78

声のひろば 80 編集後記 82

ウクライナ戦争と

反ユダヤ主義

ラブロフ発言の背景

乙君、今年2月24日のロシアによるウクライナ侵攻は、世界史に残る大事件です。国家間の係争を戦争によって解決することを禁じた第二次世界大戦後の国際秩序が大きく変化しようとしています。それと同時に注目しなくてはならないのが、ロシアとウクライナで反ユダヤ主義が再び頭をもたげていることです。

まず、ロシアの反ユダヤ主義について取り上げます。

ヘイスラエルのベネット首相は（5月）2日、ロシアのラブロフ外相がユダヤ人大虐殺（ホロコースト）をしたナチス・ドイツの独裁者ヒトラーについて、「ヒトラーもユダヤ系だった」と述べたとして、強く非難する声明を発表した。イスラエル外務省は同日、この発言についてロシア大使を呼び出した。

佐藤 優



〔撮影：森清〕

イスラエルメディアによると、問題になっているのは1日に放送されたイタリアメディアによるテレビインタビューでの発言。ロシアがウクライナへの軍事侵攻の理由にあげる「非ナチ化」についての質問への答えの中で、ゼレンスキー大統領がユダヤ系であることと、ウクライナにナチスが存在するかどうかは別の問題との持論を展開し、「ヒトラーもユダヤ系だ

▼駐日イスラエル大使インタビュー▲

戦略的な協力関係に

ギラッド・コーヘン

《INTERVIEW》

【編集部より】昨年10月に駐日イスラエル大使に就任されたギラッド・コーヘン氏に話を伺った。

▼開花する新たな段階へ▲

——駐日イスラエル大使になられて約半年が経ちますが、まず日本の感想をお聞かせください。

コーヘン大使 毎日いろいろな分野で新しい扉が開いていくようで、感動の連続です。日本の政府関係者、外務省、国防や経済分野、文化、科学技術や学術分野、医療分野など、あらゆる方々が好意を持って接して

くれています。日本とイスラエルの関係においては、次の段階に進みつつあると感じており、そこに無限の可能性を見えています。

——次の段階というのは、どのようなイメージでしょうか。

大使 今年の5月15日で日本とイスラエルが国交を樹立して70年になりましたが、その潜在能力は量り難いものがあります。日本のイスラエルへの投資額は年間30億ドルに達し、記録を更新しています。イスラエルに研究開発拠点を置く日本企業は100を超え、両国の連携が進んで

いますが、まだまだ協力できる分野はあると思います。イスラエル政府は今年、政治、経済、文化、科学、スポーツなど、あらゆる分野での交流を深めるため、日本に使節団を送る予算を成立させました。日本とイスラエルの関係は、これからあらゆることを共に実行していく段階、戦略的な段階に入ったと思います。

イスラエルにはアメリカ、ドイツやイギリスなどのヨーロッパ諸国、インドなど、親密な関係を構築してきた国々があります。日本との関係もそうしたレベルに到達できると信

イスラエルと中国

齋藤真言

ペサハの贈り物騒動

4月12日の朝、通勤の車中でいつものようにガレイ・ツァハル（イスラエル軍ラジオ放送局）のニュースに耳を傾けていた。ウクライナ戦争の情報、4月1日から始まったイスラム教のラマダンで国内治安の緊張が高まっているという報道と共に、全く別のニュースが飛び込んできた。若い女性レポーターからの第一報は、シャバク（国内の治安維持やテロ

スパイ活動を取り締まるイスラエル総保安庁）が各省庁に対し、在イスラエル中国大使館から送られてきた贈り物を回収する通達を出していた。科学技術省、文化省、保健省宛てにすでに届いていた中国大使館からの荷物を、保安担当部門がセキュリティチェックでX線透過検査装置に通したところ、中身の保温ガラスカップに不審な電子部品が取り付けてあった。盗聴装置の疑いがあるので回収指示を出したとのことだった。

ユダヤ教3大祭りの1つであるペサハ（逾越し祭）を3日後に控え、カップはそのお祝い品だったという。各省庁の保安担当部門には、事前に中国大使館からの荷物をX線チェックにかけるようシャバクから通達があったため、今回の不審物が速やかに発見されたのである。

このニュースが報道されると、在イスラエル中国大使館は、中国の威信をひどく傷つける行為だとして非難声明を出した。カップは市販されている物で、問題の電子部品はカップ内の温度を保つための部品であると主張し、イスラエル政府に強く抗議し釈明を求めた。中国との関係悪化を恐れたイスラエル政府は、回収したカップの解析を早急に進めるようシャバクに指示を出し、同日中に問題のカップは不審物ではなかった旨を発表した。

日本の非常識からみた中東の非常識

ウクライナに便乗する

論者たち

——無知とムードだけの主張

滝川義人

○重なる点と相違点

ロシアのウクライナ侵略後、日本では珍論奇論がいろいろ登場した。

西岸地区とガザでパレスチナ支援を続ける日本の国際ボランティアセンター（JVC）は、月刊JVC #5で、「ウクライナで起っていることに、世界が今衝撃を受け、心を痛めています。これは、イスラエルによる占領、封鎖下で空襲をはじめと

する打撃を受け続け、それに抵抗してきたパレスチナの状況と重なって見える……」と主張した。

両者の状況で、重なっている面は1つある。ほかは全く重なっていない。重なっているのは、占領を目的とした侵攻によって、難民が発生した点である。ウクライナに侵攻したロシア軍は、重武装の部隊をもって市街地に突入し、無惨な破壊をくり返し、多数の難民を作り出した。

一方のパレスチナでは、英委任統治の終わる1948年5月14日を期して、アラブ5カ国の正規軍が独立を宣言した新生イスラエルへ侵攻した。レバノン4個大隊、シリアは新鋭の1個旅団、イラクは3個旅団（うち1つは装甲旅団）、エジプトは4個旅団に戦車1個連隊が突入した。トランスヨルダンのアラブ軍団（7800）とトランスヨルダン・フロンティア隊（3000）は、少なくともその半分が正面に張りついていたと考えられる。そのほかに不正規軍のアラブ解放軍3個旅団、ムスリム兄弟団2個大隊も戦っていた。

これに対し新生イスラエルは、まだ正規軍を持っておらず、自衛組織のハガナーに登録している人が、戦闘勃発頃で3・7万、他に分派組織イルグン2000、レヒ400人がいた。普段は仕事をしている人たち

多層の視点から理解する

イスラエルと日本との関係

新井 均

「イスラエル月間」

2月17日から3月16日にかけて、東大先端研・創発戦略研究オーブンラボが主催する「イスラエル月間」と称するウェビナー（ウェブ上のセミナー）が開催された。昨年は3月1～5日の5日間、「イスラエル週間」と称して外交、技術、教育など、多彩なテーマで専門家の講演やパネルディスカッションがあったが、今年は日本・イスラエル国交樹立70周年

ということもあって期間を一カ月に拡張し、ブロックチェーン技術から聖書研究に至るまで幅広いテーマでのウェビナーが開催された。

初回の講演は、日本とイスラエルの関係を「多層」で理解しようという大変示唆に富む内容であり、今回はその概要を紹介したい。講師はヘブライ大学人文学部長ニシム・オトマズキン教授。研究分野は「日本政治と外交関係」「アジアにおける日本の文化外交」などで、金閣寺を60

回訪れたことのある日本通である。

本ウェビナーはイスラエル月間のスタートということもあり、ギラッド・コーヘン駐日イスラエル大使が開幕の挨拶を行なった。大使は、今年が両国関係にとってとても大きな飛躍の年になると述べ、両国の関係者にその意志があることに加えて、8・1%という経済成長を達成しているイスラエルが日本に投資して多分野で協力したいと考えているからであると強調した。そのためにも人

バブカ

越出水月

バブカもまた例外ではなかった。インスタ映える独特のマーブル模様と、欧米在住者であれば誰しも1回は食べたことがある親しみやすさで、すぐに流行となったようだ。

手作りのバブカの写真を投稿したら友人から注文が入り、口コミが広がって今では通販で100人以上が待っていると言う。

❖ バブカとは

バブカとは、ヘブライ語で「ウガット・シュマリーム」、直訳すると「イーストのケーキ」という名の菓子パンである。

特徴は独特の美しいマーブル模様。日本で売られている、チョコが練りこまれたデニツシュパンのような見た目だが、もっと甘くて、ケーキと呼ぶにはどっしりし

❖ ブーム再燃!?

「あの懐かしのお菓子『バブカ』が今また流行っている!」という見出しの英語の記事がスマホの画面に飛び込んできた。

「え、バブカってイスラエルでよく食べたパン生地チョコケーキだよな?」と懐かしくなり、あの家庭的な味がなぜわざわざニュー

ヨークやオーストラリアで流行することになったのか、不思議に思っ
て調べてみた。

すると、コロナ禍と関係があることがわかった。緊急事態宣言が発令されてすぐの日本でも、小麦粉やバターが売り切れになるほどのお菓子作りブームが起こったのを覚えている方も多いだろう。世界中で同じ現象が起きたようで、

大地のこころ

池田 裕

● 小さな巨人

第二次大戦後の米ソ間の「冷戦」がようやく終わった1991年、日本人として、また女性として初の国連難民高等弁務官に就任、2期10年間務めた緒方貞子さん（1927～2019年）が亡くなってから3年半が過ぎた。

任期中、緒方さんは強力なリーダーシップを発揮、人道支援の世界的な方向性を定める上で大いに貢献したとして高く評価されている。緒方さんは現場主義を貫き、防弾チョッキ・ヘルメット姿で中東、バルカン半島、アフリカなどの紛争地域に自ら赴き、難民の置かれた状況に素早く対処する緊急事態即応体制の強化に尽くした。

緒方さんは難民問題の発端は本質的に政治であり、

問題の解決には、世界的、地域的な大国または安全保障理事会による断固とした介入が必要であるという確信から、国連で最も強力な政治的機関である安全保障理事会で12回にわたって発言し、政治の担い手たちに対し人道危機の解決に本腰を入れるよう強く促した（「人間の安全保障を求めて」）。

緒方貞子さんは、第29代首相犬養毅（1855～1932年）の曾孫に当たる。犬養毅は備中庭瀬藩士の子で、自己抑制と他者への思いやりを説いた論語の「剛毅朴訥（じん）に近し」を座右の銘とし、政治家として侵略主義ではなく民主と平和こそ日本の進む道と信じたが、1932年5月15日、海軍青年将校たちによるクーデター事件で凶弾に倒れた。葬儀には、たまたま来日中で帝国ホテル

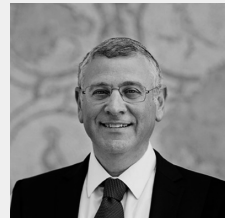
サムエル記講話

《サムエル記上18章》

ヨナタンとミカル

ベニー・ラウ

(那須雄二訳)



הרב בני לאו

● 神が仲介した愛

17章の最後で、サウルが「あなたは誰の子か」と尋ねると、ダビデは「あなたの僕ベツレヘム人のエッサイの息子です」と答えました。これは奇妙な描写です。サウルは自分の目の前で王宮に出入りしていたダビデを見ていたはずですが、しかし石ころ1つで巨人ゴリアトを仕留めてしまったダビデを、サウルは別の視点で見っていました。新しい時代の始まりを感じたのです。

18章ではサウルの息子ヨナタン、

娘ミカルがダビデを非常に愛したという内容が書かれています。

ダビデがサウルと語り終えた時、ヨナタンの魂はダビデの魂に結び付き、ヨナタンは自分の魂のようにダビデを愛した。(1節)

魂と魂が結びついたという表現、そしてヨナタンが自分の魂のようにダビデを愛したという描写は、最高の愛を表しています。

ここに登場するヨナタンという名前は、ヘブライ語で「**יְהוֹנָתָן**」へイエホナタン」と書かれています。今ま

では「**יְהוֹנָתָן**」(ヨナタン)と記されていたのですが(サムエル記上13章、14章等)、今後ダビデとの関係で語られる時、ダビデとの愛、あるいはダビデに対する忠誠心が語られる時などはすべて「**יְהוֹנָתָן**」と「**יְהוֹנָתָן**」が入った形で記されています。「**יְהוֹ**」というヘブライ文字は重要で、この1字で神の名を表します。つまり、ヨナタンがダビデを愛した愛というのは人間レベルの愛ではなく、「**יְהוֹ**」が中に入って、神が仲介した愛であるという解釈があります。

現代ギリシア語で読む

新約聖書(2)

藤原豊樹

○トンネルの開通

アテネに滞在して3カ月くらい経った頃のことです。語学教室の帰途、ふとキオスクに吊り下げてある新聞に目を留めると、以下のような記事の見出しがありました。
Διαvoιγθηκε η Σηπαραγα <ディ
アニフスイケ・イ・シランガ>
「トンネルが開通した」

現代の新聞に Διαvoιγθηκε <ディ
アニフスイケ> という新約聖書
にある単語が使われていることに
大変驚きました。その頃、ギリシ
ア語に親しむために使徒言行録の
原文を重点的に音読していたの
で、この単語を覚えていたので
す。早速その新聞を買って帰り、
聖書と比較してみました。
(※聖書の引用は新共同訳)

アテネのキオスクで売られている新聞



ティアアティラ市出身の紫布を商
う人で、神をあがめるリディアと
いう婦人も話を聞いていたが、主
が彼女の心を開かれたので、彼女
はパウロの話の注意深く聞いた。
(使徒16章14節)

これは使徒パウロがギリシアの
北にある都市フィリピにやって来
たときのことです。主が「開いた
σηπαραγεν δεινικセン」とい
う動詞の原形は Διαvoιγθω <ディ
アニゴ>で、新聞記事の「開通し

「カルケドン決定」の功罪

塩尻和子

●東西教会の分離

キリスト教は、451年のカルケドン公会議でのイエス論、つまり「三位一体論」の解釈によって「カルケドン派」と「非カルケドン派」とに宗派が大きく分かれた後も、ヨーロッパの政治的動向に左右されて、幾度となく教会の分裂騒動に翻弄されてきた。まず、西ローマ帝国の滅亡

(476年)によって、ローマを中心に置く西方教会とコンスタンティノープルを中心に据えるビザンツ教会とが対抗するようになった。

西方教会は、使徒ペテロの権威によって建設されたと主張し、ラテン文化を背景として政治的・実利的な性格を持ち、普遍的を意味する「カトリック」という言葉を用いて「唯一の聖なる普遍的な使徒直伝の教

会」と表現し、全人類のための唯一の救済機関として権威主義的な教会を構成した。

一方のビザンツ(ビザンティン)教会は政教一致の性格を持ち、皇帝が教会の教皇を兼ね、ギリシア文化を受け継いで瞑想的な傾向を有し、「正教会(オースドックス)」と称した。正教会には神人一体的な思想があり、ローマカトリックのように聖俗分離を主張せず、霊肉一致の特色と人間の救済を重んじる傾向があり、キリスト教会の中では最も神秘的な雰囲気がある。正教会はビザンツ帝国と共に繁栄し、聖画像(イコン)の製作や、そのイコンを聖なるものとして崇敬する特徴ができた。

西暦610年に発祥したイスマムが中東一帯に勢力を伸ばすと、東方正教会は北方へ展開し、スラブ地方からモスクワまで広がっていつ

エジプトのパン事情

光永光翼

深刻な小麦不足

ロシアがウクライナに侵攻してから3カ月が過ぎた。死傷者は増え続け、今も終息の気配は見られない。この戦争は当事国のみならず世界へ波紋を広げており、私たちの日常生活にも大きな影響を与えている。その1つは、あらゆるジャンルで価格が高騰していることである。日本でもこの夏、パンやパスタ、うどんなどの小麦製品が軒並み大幅な再値上げを予定し

ているという。全世界的に見ても小麦の価格はすでに40%以上も高騰している。

中東の国々は日本以上に事態が深刻だ。値上げならまだしも、あと数カ月でパンが食卓から消えてしまうかも知れない危機に直面しているのである。例えばエジプトでは、輸入される8割以上の小麦をロシアとウクライナに依存しているからだ。

中東でパンがなくなるといのは、日本で言うとうちの白米がな

くなるのに匹敵するほど絶望的なことである。「パンのない生活はもはや生活ではない」というアラブの古いことわざがあるが、干魃かんばつや気候変動によるものではなく、遠い北国の戦争によって小麦が入ってこない事態になるうとは、誰が予測できただろう。

ウクライナでは、出荷ができずに留められている小麦が山のように積まれているという。エジプトに輸出されるはずの約30万トンの小麦は、貨物船が港から動けないために出荷がストップした状態に陥っている。

パン好きな民族

エジプトは古代より水量豊かなナイル川の恩恵によって農業大国となり、周辺の国々を養ってきた歴史がある。特にエジプトのエン

○ ギャラリー「イスラエルの風」が贈る今月の一枚 ○



「イスラエルの秘境 モア遺跡」 撮影・平岡真一郎

世界遺産となったイスラエル南部の「香料街道とネゲブの砂漠都市」。だがナバテヤ人の砂漠都市の1つモアは世界遺産に認定されておらず、道路も整備されていない穴場だ。この美しい景色に、古代人も長旅の疲れが癒されたことだろう。

★手漉き和紙にプリントした、絵画のような独特な雰囲気をもつ作品です★

サイズ

37×46cm ⇨40,000円

制作元：ギャラリー「イスラエルの風」
〒183-0042 東京都府中市武蔵台 2-18-24

お問合せは
ミルトスへ

世界を変えた 15 の物語

イノベーションの国 イスラエル

好評の新刊



アビ・ヨレシュ [著]

横田勇人 [訳]

四六判・並製 272 頁 1,870 円 (税込)

目指すは「世界の修復」

「地上のすべての氏族はあなたによって祝福される」(創世記 12:3)

このアブラハムの契約が、現代イスラエルにおけるイノベーションとして果たされている!?

本書の焦点はイノベーションの技術そのものではなく、それらを発案したイスラエル人にある。彼らはどのようなところからそれを思いつき、どんな苦難を乗り越え、どう成功へと導いたのか。また、結実したイノベーションは「世界の修復」にどのように貢献しているのか。15の発明秘話を紐解き、そのアイデアの源泉に迫る!

● 著者 ● アビ・ヨレシュ 《Avi Jorisch》

起業家、中東専門家、米外交政策評議会 (AFPC) 上級研究員。アラブ世界やイスラム過激主義、テロ対策、違法金融の国際的な動向調査を専門とし、米財務省と国防総省での勤務経験もある。米ビンガムトン大学で歴史学を学び、イスラエルのヘブライ大学でイスラム史の修士号を取得。エジプトのカイロ・アメリカン大学とアズハル大学でアラビア語とイスラム思想を学んだ。ニューヨーク・タイムズ、ウォール・ストリート・ジャーナル、アルアラビーヤなどに寄稿している。